

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 呉 修喆

『漢字文化における文字遊戯の近代的形成—燈謎を例にして—』と題された本論文は、「燈謎」に関する、通時的変遷と社会的影響力を扱った、おそらくは世界最初の包括的論考である。燈謎とは、もともと中国民間祭祀の際、灯籠に謎かけの文が書かれ、参加者が解答するものであった。当初はシンプルな謎かけが多く、漢字1文字を問うものなどもあったが、のちには四書五経や史書を典拠とする該博な知識を必要とする、複雑なものも生まれていく。それは、一見すると文学的価値に乏しい単なる文字遊び、ことば遊びであるように見え、事実これまではそのように扱われてきた。しかし、本論文は文人にとって文学的創作活動の余興であり、民衆にとっては元宵節などの年間行事を彩る遊戯として受容されてきた燈謎が、実は中国語が漢字という独特な文字によって構成されるエクリチュールを有しているからこそ可能だった特殊な文学形態であることを示し、これを一つのジャンルに高めようとする。この着眼点はきわめて独創的であると言うべきである。さらに本論文は、このユニークな対象に通時的アプローチを試みて、明代から清代を経て近代に至って、ジャンルと呼ぶにふさわしい形態を得るまでの歴史を叙述すると共に、近代以降に関しては、いわば燈謎のエコロジーとも呼ぶべき社会史的論述を行った。すなわち、燈謎作家・愛好家集団としての「謎社」の組織化、コミュニティ化の様相、ひいてはそこに集う「謎人」たちのローカル・アイデンティティの形成といった興味深い事象をいきいきと明らかにしたのである。このように、本論文は優れた独創性と豊かな内容を有している。以下では、本論文の構成と概要を紹介する。

まず、序章で課題を述べた後、第Ⅰ部「燈謎の近代的文体の形成」と称して、その変遷を探求した。議論の背景には、先行論文銭南揚『謎史』が提示した、燈謎の「古体」「今体」の歴史区分がある。著者はこれを歴史的先後関係ではなく、内容として古体を民間的遊戯、今体を士大夫的正統文化に近いものとして扱う方向性を打ち出した。

第一章「明末の日用類書から見る燈謎」では、明末清初に中間階層が参考とした簡便な百科事典的と言える類書にも、「燈謎」の項目があり、その実例が掲載されているのが紹介され、分析されている。類書中の燈謎の継承関係も丹念に調査され、民間的要素と知識人的要素の混在が認められた。なかには著名知識人の作とされるものもあり、清代以降の経典的な傾向を予示するような事例を確認することができた。今体が古体から変化した過程には、儒教的素養を啓蒙しようとする目的が作用しているが、日用類書の編纂は、このような目的を間接的に支援する役割を担っていたと言える。特にその中に見られる短句による謎の提示は、清代以降の燈謎の傾向を先駆的に表わしているということが明らかにされた。

第二章「章回小説との共生をめぐって」は、謎かけ問答のような民間の演芸から、白話小説に取り入れられ、登場人物たちの会話のなかに表現された燈謎の過程が論じられる。扱われる白話の章回小説は、『醒世因縁伝』から『紅樓夢』『鏡花縁』など清代の作品として著名なものである。著者は、ここに出てくる燈謎は、単に遊戯の挿話として描かれているだけでなく、登場人物の性格や理知を反映していると主張する。燈謎の創作技巧によって、人物が表現されているわけで、燈謎がある種の文芸的対象として把握されつつあることが理解される。特に『鏡花縁』では、謎を解く側としての読者ではなく、謎を創作する側の作者に焦点があてられたのであった。

第三章「『燈謎』をめぐる文人意識の変化——謎話から得られる考察」は、文芸的対象となりつつあった燈謎が、詩や詞と同様に、参考書・評価書としての「謎話」を生み出したこと、そして、そこにも清代以来の濃厚な「文人意識」と社会的時事的な関心が窺われることを指摘した。小説が民国になって文芸の中核になったのと同様に、燈謎も「小道と雖も必ず観る可き者あり」（『論語』）、すなわち「取るに足らない技芸であってもそこには必ず価値があるはずだ」という価値評価を、一部の知識人たち（多くは下層文人集団である）が共有するようになった。こうして作者としての「謎人」が成立し、彼らが集う場として「謎社」が組織された。そこでは「雅」「俗」あるいは「書家」「江湖（民間）」の区別が意識され、同時に通常から逸脱した思考力が必要だとされる。また民国時代は、ジャーナリズムの発展によって、新聞雑誌に燈謎が掲載され、活況を呈した。しかし一方で、「謎語」と混同され博打の材料とされて批判されたり、新しく誕生した民俗学によって、旧式の史大夫文化のひとつとして排除の対象になることもあった。

以上のように、総じて言えば、第Ⅰ部は、20世紀前半までの燈謎の歴史をたどり、燈謎が文芸の一ジャンルとして形成され、意識的な創作主体となる人びとを産み出したプロセスを描いている。

第Ⅱ部は「燈謎の近代的実践形態の形成」と題され、20世紀から現在に到る燈謎の実際的な活動を、台湾と大陸に分けて議論した。

第四章「二〇世紀台湾の謎社——文化政策の変化を手がかりに」は、つぎのように概括される。台湾においては、日本統治下でも、日本語が強制されていなかった頃は、燈謎大会などのイベントが継続されていた。日本敗戦後には、外省人と本省人との「省籍矛盾」が交流を妨げたが、蒋介石の「文化復興運動」に双方が呼応する形で、問題は解決されていた。しかし、民間の燈謎団体が、政府の文化政策に応じて支援を求める形になったため、政策が「文化建設」に変わると、燈謎の位置づけも「中国化」と「本土化」（現地化）の間を揺れ動くこととなり、地方の民間団体に混乱をもたらした。その後、中華文化圏との交流によって「台湾燈謎」というブランドとして、現地化に可能性を見出そうとしている。

第五章「戦後大陸における燈謎の活動環境」においては、第二次世界大戦後から1990年代までの中国大陸に焦点を当てて、燈謎がどのように中国共産党の文化政策に包括・統制

されていったかを明らかにした。建国後の社会主義建設時代には、燈謎の非大衆性を改め、大衆向け文化活動という位置づけが設定されるようになった。文化大革命の時代には、守旧的なジャンルとして他の文化活動と同様に弾圧を免れなかったが、1980年代に改革開放政策が始まると、文革以前に培われた大衆性を基礎として、燈謎の概説書、参考書が大量に出版された。燈謎は、労働者の文化クラブなどで復活したのである。台湾との大きな違いは、政府機関によって下位の組織が担保されていることである。一方で商業の活発化とともに、競技化の傾向も強くなり、謎会是一種の大衆的イベントと化すという問題も残した。

終章においては、本論文全体の論述を振り返りながら、本論文のねらいが示された。すなわち、「エリート-民間」という枠組みのもとで燈謎の歴史的変遷を描くと共に、形・音・義という三要素から成り立つ漢字という表意文字ならではの特徴が、燈謎の文学技巧を支え、同時に、燈謎自体が漢字に新たな生命力を賦与していくさまを明らかにすることこそ、本論文のねらいだったのである。

審査委員会では、本論文の着眼点の独創性と論証の説得性について高い評価の意見が提出された。とりわけ第三章以降の近代燈謎をめぐる社会史的アプローチによって明らかにされた燈謎と謎人の生態のいきいきとした描写は、本論文の著者ならではの成果であるとの評価がなされた。

しかしその一方で、いくつかの問題点も指摘された。第一に、前近代の古典韻文が多数引用されているが、その解釈や典拠には誤解・誤読されたものが間々見られた。少なくとも第一章に関しては、将来本論文を出版等する場合には典拠・解釈の洗い直しが必要である。第二に、「古体」「今体」について、著者の定義がやや曖昧なため、読者を混乱させるような表現がある。第三に著者は、文人的で典雅な正統文化に、肯定的な価値を与えているように見えるが、遊戯としての燈謎の分析枠組みとしては、やや偏っている。現代における大陸の燈謎活動が、大衆化したことと、著者のいう謎人の成立との関係はどうなるのであろう。中立的な立ち位置から分析するやり方もあったのではないか。また、「終章」で若干触れられているが、燈謎は、表意文字としての漢字の生命力を反面から証明する可能性をたしかに有しており、本論文はその一端を示したが、さらにこの点をつきつめて分析することができれば、なおよいものになったであろうとも指摘された。

もっとも、最後の指摘は望蜀の嘆とも言うべきものであって、むしろ本論文が初めて燈謎に本格的な学術的検討を加えたという功績によって、将来の漢字エクリチュール研究に新たなアプローチの可能性が示されたことを佳とすべきであろう。

以上、指摘されたような問題点は残るものの、「燈謎」という中国文化周縁の文字文化が有する独自の価値を見出し、その歴史的社会的影響力を包括的に論じたことの貢献は、十分に博士論文に値するものであり、審査委員会として、博士（学術）の学位の授与を提案するものである。